

## 地方地場産業の変遷

— 兵庫県豊岡の鞆・囊工業の場合 —

はしがき

東京、大阪、愛知に次ぐ鞆・囊物の産地である兵庫県豊岡は古くから杞柳による柳行李の産地として知られていた。鞆や囊物の生産はこの柳行李の生産を基盤に成立、発展をしてきたのであり、豊岡市及びその周辺地域の地域産業として非常に大きな役割を果たしている。

今日、織物とか陶器漆器をはじめ多くの日用的消費財生産の中には、中小・零細な企業を中心にいわゆる特産地を形成しているものが数多くある。(経済企画庁総合計画局中小企業班の「地場産業の動向」昭和四十二年によれば、全国の工業生産のうちいわゆる特産地において生産されるものは、工場数において四一・四％、出荷額において約二〇％を占めるといふ。)したがって、特産地も全国的に分布し、その中には封建時代からの伝統をひきつぎ生産しているものや、近代工業発生以後の雑貨品の生産地として展開しているもの、あるいは最近になって工業化の進展にともない工業誘致等で急速に形成されたものなどさまざまである。また、その地域も封建的都市を基盤に成立するも

井 出 策 夫

の、農村工業として農村地域の社会的基盤に支えられるもの、また近代都市の中に展開するものなど、いろいろな形態がみられる。

したがって、従来かかる工業の研究は数多くみられる。それらの多くは在来工業とか伝統工業というカテゴリーの中で論じられ、地方産地の存立の基盤、形成過程、存在形態など多岐にわたる研究がある<sup>④</sup>。あるいは農村工業という範疇で農村地域とのかかり合いから論じられたものもある。他方、地理学のみならず経済史や地方史の分野においても数多くの研究が報告されている<sup>⑤</sup>。とくに経済史の中では中小零細企業の問題解明の一環としてマニファクチャー論争や問屋制生産の形態論的な立場で論じられたものが数多くみられる<sup>⑥</sup>。それぞれの研究はその内容、目的は区々であるが、何れも産地形成の要因、沿革、存立の基盤などから出発している点においては共通している。

ところで、近年の経済高度成長の中で商品需要の急激な変化が、製品素材の変化、技術革新などともなつて大きくあらわれ、それがため在来工業、伝統工業などの存立形態の上にもさまざまな影響を与え、産地そのものにも種々の変貌がみられ、さらにそれが地域構造の変化となつてあらわれている例が数多く存在している<sup>⑦</sup>。

筆者はかねてより、こうした中小・零細な生産集団を日用消費財生産としてとらえ、その存立形態を考察してきた<sup>⑧</sup>。そして、それらは大都市における生産を中心としてきた。そこで今回は地方における生産集団（地場産業）が、消費性向の変化にともない如何なる変化をとげたかを考察することにした。すなわち、柳行李を中心とする杞柳工業がビニール鞆を中心とする鞆・囊物工業へ転換してゆく過程の中で、生産体系、地域構造の上に如何なる変化があらわれたか、について考察したいと考えた。

## 一、地場産業の性格

地場産業ということばは一般的にはよく用いられるものであるが、学問的用語としては必ずしも明確な概念をもつて用いられていない。これに類するものとしては「在来工業」「伝統工業」「特産品工業」などの語があるが、これらは中小・零細な日用消費財生産の生産集団をすべて包含するためには十分とはいえない。豊岡における本稿の対象業種にしても杞柳工業は在来・伝統的な工業といえても鞆や囊物は伝統工業とはいえない。もちろん在来・伝統工業、特産品工業のもつ概念が、中央資本に対する地方資本、地元資本として成立したいわゆる地場産業と重なり合っている部分があることはいうまでもない。近年、官庁等の調査報告<sup>⑧</sup>等では「産地企業」「産地工業」というような語を用いているものもみられる。

上田宗次郎<sup>⑨</sup>は地場産業を次の五つの項目で規定している。一、起業が古く手工業、家内工業の生産形態をもつもの、二、地元資本、労働力など地域の社会経済条件と密接に結びついている、三、小・零細生産者を中心に問屋性生産形態を残存せしめているもの、四、労働力において農村の低賃金労働に依存する労働集約的なものである、五、一般に生活必需品とは異なり、主として消費財であり、趣味や趣向の対象となる特産品の生産であり、輸出依存の高いもの、などである。

これに対して板倉勝高は<sup>⑩</sup>、この規定に一応の肯定をみせながら農村工業的性格の強い規定や、歴史的、伝統的規定から経済循環の中でとり残されたものという印象を受け勝ちな性格規定に不満を述べ、「中小零細の生産集団によって生産され、問屋機能による独自の流通過程によって全国的市場に流される日用消費財生産である」と定義してい

る。

筆者は「地場」という語がそれ自体地域的概念をもっており、発生ないし形成過程の中ではっきりした集団産地を形成していること、問屋形態は今日必ずしも生産面では大きく影響を与えずとも、流通面においては依然として強い影響力をもっていること、そのため中央資本、国家資本などからは隔絶されたいわゆる地場資本を主軸に生産が展開していること、従って企業の経営規模が小さく中小・零細経営を基盤に存在している、しかし、製品の市場は一地方、一部落内だけのものでなくかなり広いマーケットを持ち、出来れば全国的マーケット、貿易市場と結合していること、そのため生産量も市場におけるシェアがかなり大きく、特産地を形成していること、などの点を地場産業の性格と考えている。もとより、これらの規定は固定的なものでなく、産業構造の変化によって流動するものであり、また、上田氏、板倉氏の規定をも包含し、かなりフレキシブルにとらえなければならぬと考える。

## 二、杞柳生産地域の形成

豊岡（但馬地方）における杞柳工業の歴史はあまりさだかではないが、この地方の杞柳製品が正倉院の御物の中にみられることなどから、かなり古いものと思われる。杞柳製品は杞柳すなわち「コオリヤナギ」を原料に編成したもので、古くは中国で酒の容器をつつむ栝捲はくけんの材料として用いられていた。また、ヨーロッパでは乳児のゆりかご、菓物を入れる容器、鳥籠、ブドウ酒の容器を入れる籠など多方面に用いられ、その製造のためパリには籠細工師の免許が発行され、組合が結成されていた<sup>⑧</sup>。わが国では主として行李の製造に用いられていたようである。

原料の杞柳栽培が何時頃から豊岡で行われ、また何故この地に栽培されるようになったかについては詳らかでな

い。桑原公徳<sup>⑧</sup>や石田修一<sup>⑩</sup>(松感)、森田敬一<sup>⑨</sup>などによれば、「杞柳の生育は氣候や土質を選ばず、むしろ瘠地では加工しやすいい良好なものが出来、但馬の杞柳は円山川の氾濫原に発祥した」とのべており、豊岡盆地の荒原が立地の要因としている。しかし、「……此の樹の性必ずしも肥える地を要せず。池、沢、洲、渚などのみずちなる間地<sup>まぢち</sup>にてもよく成長せり……此樹は同州(但馬)のみ種を栽培せしも、近年東京内藤新宿農局試験所で栽培せしもその繁殖彼地と異なることなし。以て其の地を扱ばざるを知るべし……」<sup>⑧</sup>とあり、前記研究とともに何故豊岡に立地したかは明らかでない。しかも、「我が日本においては之が最初の栽培地は但馬の豊岡にして、維新前にありては、同地の藩政にて専売物とし、之が栽培及び柳行李の製作を秘密にし、若し一本の杞柳だも、之を他藩に販売したるものは、直に藩則に照して身首忽ち処を異にするに至りしという……」<sup>⑨</sup>のをみても栽培の發生の理由は分からぬ。しかし、かなり古くから杞柳栽培がおこなわれ、柳行李の生産もさかんであったことはたしかである。

行李生産の記録としては中世のものもあるが、在地文書としては近世初頭のもののみである。寛文八年(一六八八)京極藩の城下町となった豊岡ではすでにかなりの生産が行われており、それが大阪方面へ出荷され但馬の柳行李の名が知られていた。正徳年間にかかれた和漢三才図会にも記載されているところをみると特産地としての名声はかなり高かったものと思われる。

生産された柳行李は問屋を通じての流通過程にのせられていた。宝曆一三年(一七六三)の在地文書には「此度大阪に骨柳(柳行李のこと、筆者註)問屋一軒被仰附候……」とあり、また文政五年(一八二三)には「骨柳商売の儀は当所第一之物産に候へば他国より頼頼み候とも教候儀は勿論、縁掛、藤引等に迄迄教遣はし候儀、決して無用之事に候……」とあり当地の独占的生産としての地歩を築いていたことがうかがえる。一方地元にも地元問屋の成立がみられ

る。文政六年（一八二四）には産物会所、文政十二年（一八三〇）には大阪登骨柳産物会所が出来、さらに「融通諸商買並に骨柳之義共手広に出精せしめん……天保五年（一八三四）」として問屋の勢力は一層強まった<sup>⑧</sup>。

こうした地元問屋の成立は、これまでこの地方の農村における農閑余業として農家単位の一貫的生産から製造工程の分業による生産組織がつくられてきた。即ち、行李の生地をつくるものと縁掛け、藤引きなどを専業とするものに分かれた。さらに生産地域の上でも原料栽培農民は生地の編成を、町方の職人は縁掛けを、というような地域分化を出現させることとなった。生産者（農民及び職人）と問屋の関係は明らかでないが、豊岡誌などによれば始めは杞柳栽培地帯の農民が一日市に出かけ、在郷商人が買手として買手相場を立てて製品を集荷し、骨柳問屋を通じて流通していたようである。しかし、文政から天保期になると在郷商人の抬頭がみられ、毎年の運上金を負担することによって公的な特権を得ていた。ただ在郷商人の生産に対する支配形態は

- (一) 直接に生産者もしくは仲買から完成品を購入する。
- (二) 生地編み、縁かけなどの生産者に材料を支給し製造させる。
- (三) 彼らに材料購入資金を前貸しする。

という三つの形態があり、商業資本からの産業資本への転化という現象はみられなかったようである。

以上のような経緯をとりながら幕末には、永尺、大荷行李、大馬行李、飯行李、進物行李、上下行李、宗門改帖用行李、文書入れなど製品も多様化している。

明治期に入っても豊岡の独占的地位はかわらず府県物産表や興業意見にも豊岡県の特産が誌されている。しかし、専売的な性格はなくなり、勸農局を中心とする農村産業育成の一端をになって各地で生産されるようになった<sup>⑨</sup>。先

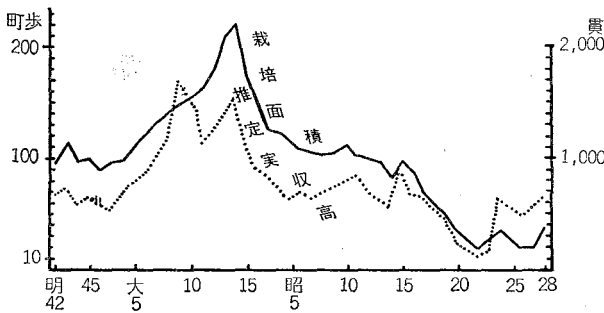


図1 杞柳栽培面積及び推定実収高推移  
(石田松蔵「豊岡の柳行李」より)

ず京大阪の農村部、美濃地方などで始まり、石川県の小松や福井県でも明治三〇年頃から杞柳栽培が行われている。また、明治三九年には長野県中野地方で豊岡から苗木をとりよせ杞柳を栽培し、その加工に着手している。以来この地方は豊岡に次ぐ杞柳製品の生産地となっている<sup>⑧</sup>。こうした地方への杞柳栽培の伝播は、円山川の改修工事による

当地方の栽培面積の減少などにもなつて大正一三年をピークに原料生産は減少している(図1)。しかし、製品面では従来 of 行李のほかに「籠」系統のものがあらわれ<sup>⑨</sup>依然として特産第一の地歩を保ち続けた。ことに日清、日露の戦役以来軍需品運搬容器としての需要が増大し、以来第二次大戦まで軍需産業として固定的生産をもちつづけてきたのである。一方、民間需要の面でも大正年代から柳バスケットの把手にファイバーを使用するものも現われ新しい需要の開拓がすすめられてきたが、全体としては徐々に生産は減つてきた。ことに戦後になると軍の需要がなくなり、加えて新しい素材による容器の出現によって杞柳製品の生産は激減した。

### 三、鞆工業の展開

豊岡で鞆製造がはじまるのは大正年代からのことである。柳バスケットの把手に使用したファイバーによるファイバー鞆(トランク)がそれである。それは戦後まで柳行李とともに豊岡を代表する製品であった。戦後になると塩化ビ

表 1 鞆類の出荷額 (昭和42年工業統計表品目編による)

(単位 百万円)

	東京	大阪	愛知	兵庫	その他	全国計
皮革製旅行鞆	559.9	109.0	60.6	47.7		829.1
合成樹脂製旅行鞆	774.4	1030.6	69.3	2875.4	神奈川 147.6	4989.0
その他の旅行鞆	647.2	227.2	64.2	1056.4	神奈川 228.5	2348.8
皮革製書類入鞆, 抱鞆	456.3	126.1	42.7	44.9		693.5
合成樹脂製書類入鞆 同 抱	258.6	168.7	103.6	91.7		651.6
その他の書類入鞆, 抱 鞆	150.2	202.7	40.8	10.7		528.1
皮革製学生鞆, ランド セル	1671.4	693.9	438.0	75.6		3071.0
その他の学生鞆, ラン ドセル	308.6	637.9	69.7	110.0		1147.7
リュックサック	173.5	121.6	22.7	—		359.9
革製ケース	4812.8	859.5	418.8	—		6567.6
その他の鞆類	1778.6	1024.9	180.6	240.7		3978.5
籐・竹・杞柳等の容器	—		104.2	650.3	長野 192.8	1621.6

ニールを原料にビニール鞆がファイバー鞆に代って登場、ことに昭和二七年実用新案のファスナーを使用したオーブンケースが生産されるようになると、鞆生産地としての豊岡の地位は急上昇した。

現在、全国の鞆の主要生産地は東京、大阪、愛知、兵庫(豊岡)であるが、東京は皮革製の旅行かばん、書類入れかばん、学生かばんなど高級品に特色をもっている。大阪は合成樹脂製の諸かばんであり、愛知(名古屋)はランドセルや婦人用バッグに特色をもっている。これに対して兵庫(豊岡)では大衆品、大量品の箱物(旅行かばん)が中心となっており、最近ではエレガントケースと称するブリーフケースが多い(表1)。

表1の数字は工業統計表にもとづくものであるが、兵庫県の鞆類合計は約四六億円の出荷額となっており、杞柳製品等を加えても五二億円である。



表 2 但馬地方の鞆囊工業 (昭42 豊岡市統計)

	豊岡市		出石町		日高町		計	
	鞆囊	杞柳	鞆囊	杞柳	鞆囊	杞柳	鞆囊	杞柳
工場数	125	700	8	360	1	120	134	1180
従業員数	1200	1400	86	650	4	150	1290	2200
生産額 (百万円)	6703	700	171	400	1	132	6875	1232

しかし、豊岡市の統計によれば、豊岡市とその周辺の出石、日高町を加えて約六九億、杞柳製品を加えて約八一億円に達している(表2)。これは、工業統計の捕捉率のちがいにによるものであり、小零細規模の全国的集計がかなり実績より低くなっていることを示している。鞆囊工業は豊岡において最も重要な産業であることは、豊岡の全工業出荷額の約六〇%、工業従事者の一三%をもっていることから分かる(昭和四二年)。ことに工業者として一家を成さず内職に従事する者を加えると、豊岡市人口の約三〇%が鞆囊工業に関係しているとみられる。

鞆生産の急激な発達により昔からの杞柳産業は、昭和三〇年頃より原料に竹、麦稈、経木、藁草や紙紐、ポリプロピレンなどを加え、籠や装飾品などを発展させ、行李中心の杞柳産業から大きく転換していった。

#### 四、生産形態の変化

行李から籠や装飾品、鞆囊への変化は単に素材や製品の変化というだけでなく、製造工程や生産形態にもさまざまな変化をもたらした。例えば籠や装飾品の製造は木型を使って編むため行李の生地編成と縁かけという二段の作業工程が一本化し、多分に工芸的色彩の強い製品がつくられるようになった。

現在、鞆囊の生産は問屋もしくは製造卸を頂点にメーカー、下職、内職という段階にお

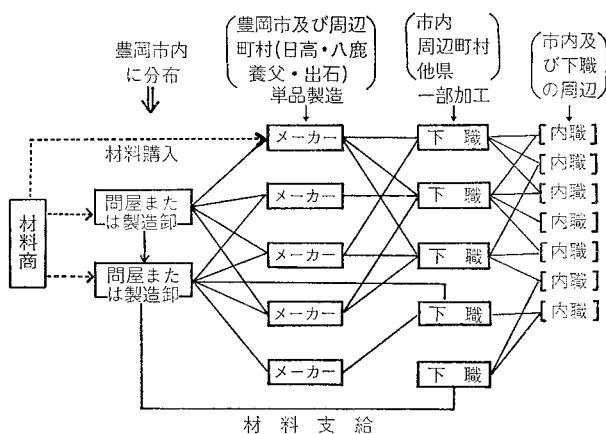


図2 豊岡における鞆工業の生産形態

屋もしくは製造卸は八七軒であるが、その取扱商品が杞柳だけであるものは九軒に過ぎず、他は鞆物及び杞柳を兼営している。このうちかつての杞柳問屋から引き続いているものは少なく、確認し得たものは三〇％程度である。残りは大正期以後の鞆時代在町商人か材料商が創業したものが目立っている。

ところで、杞柳時代の生産形態に比べて大きく異なる点は、労働力の質のちがいがいということがあげられる。杞柳生

いて生産されている(図2)。生産の主体をなすメーカーは材料商、部品商から原料を購入しデザイン、裁断の工程を行なう。それを多くの下職業者に下請させる。下職はさらにその一部を家庭内職に加工させる。メーカーと下職及び内職者の関係は必ずしも固定的ではなく、多くは仕事の内容によってメーカーを数軒の下職と、下職も数社のメーカーと結びついている。メーカーによって完成した製品は市街地には自らも製造を行う製造卸がある。これは、いくつかのメーカーから単品を購入し、自工場においても下職を擁して生産をしている。そのため製造卸はメーカーから購入する製品と自工場での製品とを合わせて自社ブランドで販売することになる。こうした製造卸業者の出自はメーカーから抬頭したもの、問屋がメーカー化したもの及び材料商から転換したものの三つの場合がある。豊岡市の商工名鑑によれば問

産の中で行李を中心とする箱物では、生地編成は手作業で行われるが、かなりの技術を必要とするものである。現在でも昔ながらの踏板と称する台の上で、中腰の姿勢でおこなわれる作業で男子労働でなければならなかった。また、縁かけ、ズック張りにしても機械化は進まず職人技術に依存するものである。

ところが、オープンケースをはじめビニールかばん、囊物は裁断こそはむずかしくとも、他は婦女子のしかも未熟練労働で十分である。比較的手のこんだオープンケースなどでも木枠にボール紙を張り、その上にゴムのりでビニールを張りつけ、さらにファスナーをミシン掛けし、把手、金具、装飾をほどこせばよいのである。しかも、工程の一つ一つが別々の下職や内職による分業により行なわれている。

このように、従来杞柳栽培地の農村において、冬季の副業として男子の伝統的生地編み技術によってつくられた生地と、町方の縁掛け職人によってつくられていた季節的労働が、都市生活者の年間労働、とくに婦女子の労働へと変化したのである。これは籠物等の杞柳製品でも同様で木型を使う編み上げは単純な労働によって生産出来るのである。

### 五、地域的存在形態の変化

豊岡地方の杞柳鞆工業の分布をみると、工場数では圧倒的に杞柳の方が多い(表2)。豊岡市内だけでも鞆一・二五に対して杞柳七〇〇となっている。これが周辺町の出石、日高ではほとんど杞柳関係だけである。しかし、従業者数との関係でみると工場規模の上からその差は多少は少なくなる。即ち鞆工場は平均して一〇人規模であるのに対して杞柳は二人という零細なものなのである。前にも述べたように統計はその捕捉率や統計記載の基準などによつ

表 3 豊岡市鞆工業規模別工場数 (1964豊岡商工名鑑による)

	1～5	6～10	11～15	16～20	21～30	31人以上	計	従業員計	平均規模
問屋・製造卸	40	23	12	6	2	4	87	780人	8.9人
鞆 囊 製 造 (メーカー)	45	28	13	4	6	2	102	805	7.8

	1人	2	3	4	5	6	7	8人以上	計	従業員計	平均
かばん加工 (下職)	15	62	16	11	6	5	3	1	119	323人	2.7人
杞 柳 製 造 (メーカー)	9	79	13	6	3	0	2	4	116	304	2.6
杞 柳 加 工 (下職)	38	65	19	4	1	0	0	0	127	246	1.9

て必ずしも実態が明らかにされてはいないのであって、この数字の中にも内職層は含まれていない。ただ、これから、鞆関係は豊岡市内の市街地部分において生産され、杞柳関係は市内及び周辺町村に広く分布していることが分かる。

豊岡市の鞆工業の規模別分布をみると(表3)、問屋・製造卸、メーカー、下職の順に平均規模は小さくなり、杞柳関係ではメーカー、下職ともさらに零細となる。このような零細な規模の業者の分布をみると図3のようになる。問屋・製造卸は市街地の小田井、桜木から南にかけて集中している。この付近は柳町通りの俗称があるかつての行李問屋街であった。メーカーの多くはその周辺にあるが、下職は市街地の周縁から日撫、九日市などの農村部に分布している。さらに杞柳製造は庄境、日撫、九日市にあり市街地には数軒を数える程度である。もっともこの図には杞柳加工は含まれておらず、また内職層の分布は不明であり、さらに鞆と杞柳の兼営などは分類されていないから市街地に杞柳関係はもう少し多いはずである。

このような分布から、かつて杞柳栽培農家の生地編成によって行李生産地域を形成していた豊岡地方が、鞆工業への転換によって農村地域の生産上の地位が大きく低下し、都市市街地に生産の中心が移行していることが分か

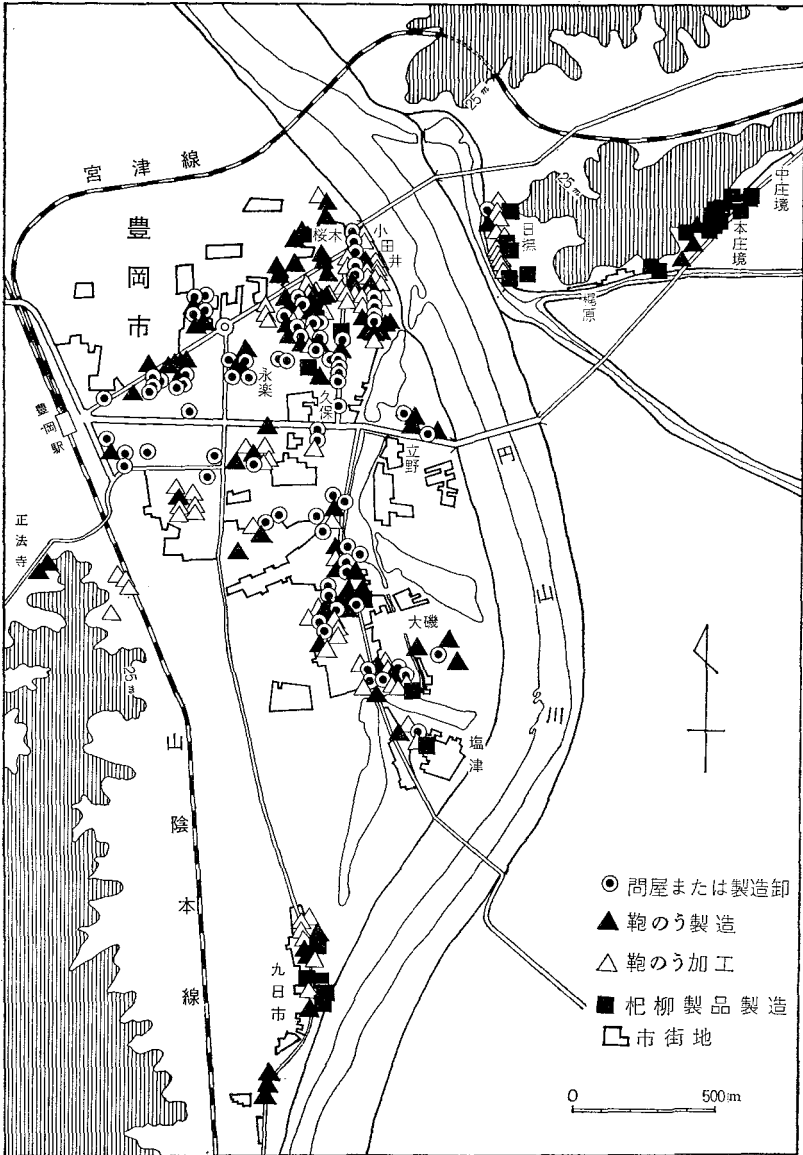


図 3 豊岡市における鞆嚢工業の分布 (1964)

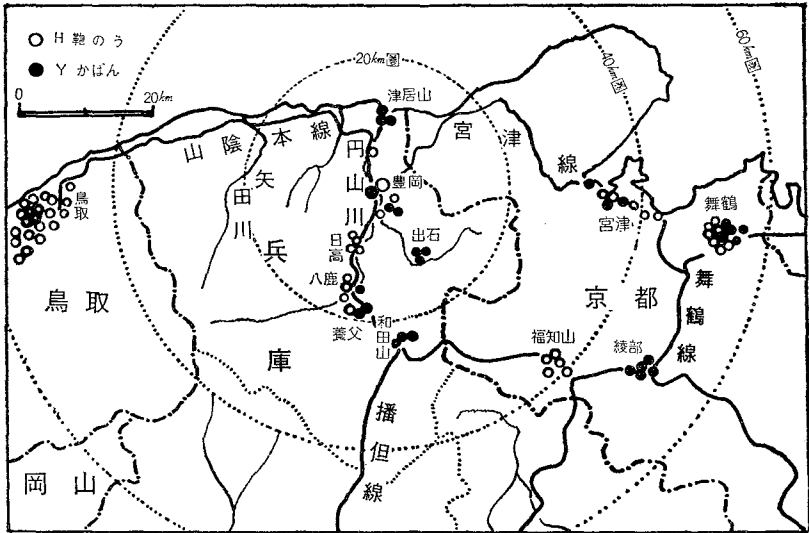


図4 鞆囊工業の下職圏 (H・Y・工場の例)

る。

豊岡市内の中堅的業者である「H鞆囊工業」について生産体系をみてみよう。Hは自らも工場をもちオープンケースやシヨルダーバッグを製造する製造卸であるが、Hへ納品する単品メーカー(完成品)は約六〇軒ある。そのうち四〇軒は市内に、二〇軒は出石、日高、八鹿、養父などにある。Hが製造するオープンケースやシヨルダーバッグの下職は周辺農村から鳥取、舞鶴、和田山、福知山にかけて約八〇軒に及ぶ(図4)。こうした下職発生は、Hが直接開拓したものや、Hへ出入りするミシンのセールスマンが地方へミシンを売る際に作業をもちこむ、といった形で発生したものである。鳥取や舞鶴などの八〇軒は市周辺の農村部に多く、各地で農家の主婦をパートタイムで雇用したり、内職をやらせたりする。そのため、時には地方の村の授産事業として学校の空教室を料や製り、農家の納屋を改造したりして作業をしている。原使った品はトラックで運搬されている。

組合の推定によれば、こうした遠隔地の下職者ないしは作

業従事者は県内県外を合わせて約二〇〇〇軒以上であらうといわれ、その範囲も鳥取県から岡山県にまで広がっているといわれる。H鞆囊のような形は例外的なものではなく、製造卸や比較的規模の大きいメーカーで、下職地域に広狭はあれごく一般的なものである。鞆のミシン掛け、のり付けなどの作業は非常に単純な作業であると同時に、きわめて労働集約的なものである。従って生産量が多くなればなるほど下職地域は労働力を求めて拡大することになる。

このような労働収奪の形態は、大阪のメリヤス業、縫製工業、岡山の既成服、長野県の電子工業など最近ことに目立ってきている。

### 結 語

豊岡市街の東、円山川をこえたところにある日舞、庄境部落はかつて杞柳栽培の中心であり、行李の生地編成のさかんなところであった。平均四反の耕地は水田と杞柳栽培が大部分であり、行李からの収入は農家の重要な家計部分を占めていた。大正以後は円山川の改修によって杞柳栽培が減少し、奥地の養父・八鹿方面や大阪、岡山、高知などの原料を購入するようになると、原料相場の変動や問屋からの原料支給などによって行李製造の利益が減少し、次第に生地編みも少なくなり男子の労働力は農閑期には出稼ぎに出るものが増加した。一方、市内を中心に生産を増加させて来た鞆囊工業はこの地方の婦女子労働を目標してビニールかばんのミシン掛けやのりつけなどの仕事を持ちこんできた。農家の中には農業をやめ、庭先に納屋工場を建て隣近所の内職の元締めをやるものも出て来た。

つまりかつて、杞柳栽培地であり自ら原料を生産し、加工をも行って来た農村工業地域は市街地の都市工業の下職

地域へと変貌したのである。

こうした事例はこの地方の鞆工業だけでなく実は全国にその例をいくつもみることが出来よう。例えば静岡の鏡台・家具からサイドボードや洋式家具へ、足利の急須、湯沸がロースターに、笠間のすりばちが民芸陶器や装飾品に、小野のソロバンが玉のれんじというように先行産業の上につて素材や製品を変化させている。

この際、このような地場産業が単に素材や製品が変わったというだけでなく、その生産形態や地域的存在形態にまで変化を与え、さらには地場産業の存在基盤にも影響を及ぼしている点に注目しなければならないのである。

註

- ① 幸田、辻本、沢田編 日本の工業化 古今書院 第一章の中に多くの文献紹介がある。
- ② 日本産業史大系 東大出版会
- ③ 藤田、伊東編 中小工業の本質 有斐閣
- ④ 中小企業庁 産地実態調査報告書
- ⑤ 井出策夫 大都市日用消費財工業の地域構造 地評 三九卷十一号
- ⑥ 井出策夫 メリヤス生産の地域的存在形態 立正大学教養部紀要 第二号
- ⑦ 板倉、井出、竹内、高橋、阪神の工業 人文地理 二〇卷一号
- ⑧ ④参照
- ⑨ 大内兵衛監修 地域と産業 新評論 二七三～二八六頁
- ⑩ 板倉勝高 地場産業の実態 統計 二〇卷八号
- ⑪ 内務省勸農局 杞柳栽培製造法（明治十年）（流通経済大学図書館蔵）
- ⑫ 桑原公德 但馬における杞柳産業の地理学的研究 地理学評論 三〇卷十二号



- ⑪ 石田修一 但馬豊岡の柳行李、日本産業史大系 近畿地方編 三六七～三七八頁 東大出版会
- ⑫ 森田敬一 低湿地帯の地域構造―淀川右岸の杞柳栽培より見たる― 人文地理 四巻一号
- ⑬ 前掲⑨
- ⑭ 新潟農事試験場 杞柳栽培及び柳行李製作法 明治三九年（流通経済大学図書館蔵）
- ⑮ 前掲⑤
- ⑯ 前掲⑨及び⑭
- ⑰ 小林考助・延徳沖沓濫原の杞柳栽培とその加工 信濃 一四巻三号
- ⑱ 明治一六年八木長右衛門が内国博覧会に出品、四二年に宇川安蔵がバスケット鞆をつくる。四三年作花良七が初めてアメリカへバスケット鞆を輸出する。「郷土百人の先覚者」兵庫県（一九六八年）による。